

2005年－2008年インタビュー記録

平林 今日子 編
安田女子大学非常勤講師

2005年8月24日 バラドリハ村

バラドリハ1、女性、1929年生

現在は年金生活を送っている。最終学歴校名はセミパラチンスク教育大学。

被曝者手帳は持っているが、どこにあるか、よく覚えていない。手帳の代わりにカルテならある。¹

生誕地は東カザフスタン州²のノヴォシュルヴァである。セミパラチンスクに勤務していたため、1949年にセミパラチンスク近郊へ転居した。教員として勤務していたため、各地を転々として暮した。1953年にはピチレッカ³へ転居した。翌1954年にノヴォシュルヴァへ戻ったが、1957年にはアルマティ⁴へ転居、1958年にはノヴォポクロフカ、1962年にはブラス、1967年にはウルジャ⁵に転居した。1971年からバラドリハ村に居住している。

1949年当時の家族構成は、母、姉、兄と自分の4人であった。父は戦争で既に死去していた。母は1906年生まれで、生前は工場で様々な仕事をしてしたが、糖尿・甲状腺・肺炎が原因で亡くなった。姉・兄は健在である。

1950年代初頭までは、食料は配給制で、主にジャガイモなどを食べた。それ以外には様々な種類のミルク、鶏肉などだった。鶏肉以外の肉を食べるのは年に一度だけだった。働き始めてから様々なものを食べるようになった。店にも豊富な種類の食料が並ぶようになった。

現在の健康状態は良くないと言ってもいいかもしれないが、まあ普通である。今年(2005年)5月、甲状腺を患い、バラドリハ村の病院で10日間、その後セミパラチンスクのがんセンター⁶にて同じく10日間ほど入院した。最後の検診はその入院の前の4月か5月頃、セミパラチンスクにて受診した。薬は服用しているが、あまりたくさん飲

¹ ここで実際にカルテを見せてくださる。

² カザフスタン東側に位置する州。州都ウスケメン(ロシア語名ウスチカメノゴルスク)。

³ カザフスタン東部の村と考えられるが、正確な位置は確認できなかった。

⁴ カザフスタン南東部の都市。旧首都。旧称アルマアタ。

⁵ 回答者によれば、アルマティの方向で、中国国境近くに位置する村。

⁶ 「セミパラチンスク地域がんセンター」を指すと考えられる。

まないようにしている。

甲状腺以外には、目の調子が悪い、心臓病、肝臓、胃の病気、貧血、関節の病気などの持病がある。1997年に息子が亡くなってから、病気にかかりやすくなった。

核実験のことは全く知らされていなかった。1958年にノヴォポクロフカに来て以来、核実験のことを知るようになった。プラスに住んでいたとき実験を見たが、危険性を知らなかった。揺れはほとんど感じず、目にしただけだが、プラスで実験を見てから病気にかかり始めたような気がする。プラスでは内臓の病気で手術を受けた。

実験で多くの人々が亡くなり、親戚のほとんどが亡くなった。主人も息子ががんで亡くなり、友人、知り合い、家族の多くもがんで亡くなった。

平和を願っている。平和な生活が訪れたと思う。これからも平和が続けばいいと思っている。

お金がかかるので、薬が無料になれば助かる。主人が亡くなって今は一人になってしまったし、経済的なことでも悩んでいる。

プラスで見たきのこ雲のことを覚えている。あとになればなるほどどんどん大きくなり、色もいろいろに変化して、最後には消えた。18、19km 程度離れた場所から見た。見たものが一体何なのか、何の知識もなかった。ただ恐怖だけを感じた。何かの研究かもしれないと思った。学校では話題にならなかった。話す理由はなかったし、皆何も知らなかったから、うまく言葉で言い表せなかった。チェルノブイリのことは話題になった。

核実験の影響は人々が亡くなり始めた最後の10年、1980年代から90年代頃知るようにになった。あの頃の人の方が丈夫だったように思う。

プラスに住んでいたときは、家と勤務先の往復で、近所の人と話すことがあまりなかったせいか、噂話を聞くこともなかった。仕事をしていたから、話す機会がなかった。

核兵器には反対だ。世界が平和になるように願っている。カザフ政府は核廃絶に向けた政策をとっているが、今の政策には賛成だ。

ソ連時代と現在の体制とではどちらがよいか、選ぶのは難しい。どちらにも良いところもあるし、悪いところもある。これは私見だが、旧ソ連時代、とりわけ戦争後の安定した時代には、旅行に行くこともできた。しかし旧ソ連崩壊前後の10年間はとても苦しかった。人が飢饉で亡くなることもあった。一方でとても豊かな生活の人もいた。

現在はとても苦しい生活を送っている。多くの薬を買わなくてはいけないし、国のせ

いなのお金をもらえない。年金は 11000 テンゲ⁷から値上げし、7 月より月 14000 テンゲになった。被曝者に対する手当⁸はない。ただし、被曝者のため検診は無料で受けられる⁸。セミパラチンスクでも無料で受けることが可能だ。

学校の先生として 37 年勤務した。37 年という長期間勤めあげたため、14000 テンゲと高額な年金を受け取っている。8000、9000 テンゲが平均的な金額である。年金も高くなったが、支払うほうも高くなった。例えば公共料金は 4000 テンゲだったものが、6000～7000 テンゲ支払わなければならなくなった。全て自分一人で支払っている。

食料はパン以外買わない。ほかのものは自分で作る。肉もほとんど買うことがなく、月に 1、2 回程度だ。ロシア正教を信仰しているため、宗教的理由による。夏はミルクなど他の食料が多くとれるから、肉はあまり食わずにすむ。冬には食べるようになる。

こんな苦しい生活を送った人には、何かいいことはないだろうか。これらの結果はどうなるのだろうか。一番大切なことは核被害がなくなることだ。世界が平和になるように願っている。日本の被曝者は長生きだが、ここでは 60 代の男性のほとんどが亡くなっている。

バラドリハ 2、女性、1932 年生

現在は年金生活を送っている。

最終学歴は小学校卒。バラドリハ村の小学校を卒業している。

誕生から現在までバラドリハ村に居住している。

1949 年当時の家族構成は、父、母、兄、姉、弟 2 人、妹の 8 人家族だった。父は 1908 年生まれで 1969 年に死去した。母は 1910 年生まれで 1981 年に死去した。姉は現在ロシアに住んでいる。妹は 15 年前に胃がんで亡くなり、弟の 1 人は 10 年前に腸の病気で亡くなった。兄ともう 1 人の弟が現在もバラドリハに住んでいる。兄は自分と同居している。

子供たちも含め、家族の皆が病気だ。

1949 年当時は土の家に住んでいた。主な食料はジャガイモ、パン、野菜などだった。パンは自家製のものだった。牛と鶏を飼っていた。

⁷ テンゲはカザフの通貨。1 テンゲ = 0.75 日本円 (2008/12/29 時点)。

⁸ カザフスタン共和国にもいわゆる「被曝者援護法」がある。詳細については、K. B. Boztaev (1999) (西条泰博訳)、『核実験場 8 月 29 日』、巻末資料 (三) 参照。ここでは手当がないとの証言だが、手当を受けているとの証言も別の回答者から得ている (次頁以降参照)。

現在の健康状態は普通だ。最後に検診を受けたのはいつだったか、覚えていない。検診はあまり受けていない。心臓の薬だけは、痛みのあるときには飲んでる。心臓病以外には、高血圧、関節の病気、頭痛などの持病がある。病気にかかり始めたのは 1990 年代からだ。これらの病気は核実験によるものだと思う。

1951 年頃、実験を体験した。きのこ雲などを目にしたことはない。家が揺れたので、外に逃げた。近隣の人たちも皆外に出た。

1950 年代に既にその実験が核の実験であることを知っていた。この村の住人は皆知っていた。核実験の影響も知っていた。うわさで、体の調子が悪くなる、病気になると聞いた。建物の中でも外でも病気になると聞いていたので、揺れが強かったため外に出た。何度も揺れた。実験のたびに揺れた。揺れの程度は、カップが食器棚から落ちるほどではなかった。軍人や役人が実験を知らせに来るようなことはなかった。

1950 年代の実験当時に、既に頭痛がしていた。

核実験は怖かった。生活も苦しかった。今は楽になったが、病気にかかっているため苦労している。病院にはあまり行かない。

これからは核実験による被害が出ないように。今現在、孫も子供も病気にかかっている。4ヶ月前に息子が亡くなった。今は、4人の孫のために生きている。

公務員として、家を建てる仕事(塗装など)をしていた。20年間勤めた。年金は 11000 テンゲだったが、14000 テンゲに増えた。勤続年数の長い者の年金は高い。被曝者手帳を持っていることによる手当はない。手帳を持っていてもいいことはない。しかし、過去に 3 回手当をもらったことがある。1 回目は 12000 テンゲ、2 回目は 13000 テンゲ、3 回目が 26000 テンゲだ。最後に受け取ったのは 8 年前(1997 年)だ。

セミパラチンスクにも時々行く。バザールなどに行く。子供がセミパラチンスクで勉強していた頃は、週に 1 回程度行っていた。出張でも行った。セミパラチンスクまでのバスは 1 日 3 便程度で、バス料金は 250 テンゲだ。3 年ほど前から 250 テンゲになった。今はそれほど頻繁には行かない。最後に行ったのは今年の 1 月で、息子のところへ行った。それから、セミパラチンスクでは 8 年前に目の手術をした。

野菜を少し作っている。住宅(アパート)の目の前に畑がある。使いたい人がお金を払って借りることのできる土地になっている。(インタビューした)この部屋ぐらいの大きさの土地を、税金を払って借りている。

現在の家賃⁹は冬の場合月 4000 テンゲだ。夏¹⁰は安く、500 テンゲになる。冬は暖房代が家賃に含まれるため高額になる。電話代、ガス代などは別途払っている。ガス代は 1200 テンゲだ。プロパンを買うので高額になる。

今の生活が苦しいというわけではないけれど、もう少し楽になりたい。今一番願っていることは自分の健康、子どもたちや家族の健康だ。

バラドリハ 3、女性、1935 年生

現在は年金生活を送っている。最終学歴はセミパラチンスク商業専門学校卒。

ジェルノフカで生まれ、1949 年でセミパラチンスクに転居し、1955 年に再びジェルノフカに戻った。1967 年より現在までバラドリハに居住している。

1949 年当時の家族構成は、母と 3 人の兄と自分の 5 人だった。兄は 5 人いたが、1949 年以前に戦争で、父と共に 2 人の兄が既に亡くなっていた。父は戦争中の 1943 年にベラルーシ・ポータル地区¹¹のルチキ村で亡くなった。2 人の兄のうち 1 人はロシアのクルスク¹²で、もう 1 人は 1945,6 年頃にロシアと日本との戦争¹³の最中に亡くなった。戦争で亡くなった親戚は全部で 12 人おり、すべて日記に書き記している。残っていた 3 人の兄も、一人は 1974 年に 44 歳で亡くなり、4 歳上の兄も 60 歳で手足が動かなくなって亡くなった。もう一人の兄も、70 歳まで生きたが既に亡くなっている。

両親は村内で仕事をしていた。住居は土堀の家だった。

1949 年当時の私達は「戦争の子供」だったので、ほとんど何も食べなかった。若いときはダイエットをしていた。パン、野菜など、食料のほとんど自分で作っていた。鶏も飼っていた。

健康状態はまったくよくない。年金のほとんどを薬に使っている。家事は自分でこなしているが、食欲がほとんどない。不眠、頭痛、めまい、全身倦怠感がある。悪夢を見ることがある。

最後に検診を受けたのは昨年（2004 年）の 9 月か 10 月だ。たくさんの病気にかかっている。甲状腺の病気、心臓病、高血圧、胃の病気、肝臓も悪く、関節も痛む。息子の

⁹ 市営の集合住宅に居住している。

¹⁰ 4 月から 10 月を指す。

¹¹ 位置を確認することはできなかった。回答者の証言をそのまま掲載している。

¹² ロシア西部、クルスク州の州都。1943 年 7、8 月、市の周辺で戦われたクルスクの戦いは第 2 次世界大戦中の最大の戦車戦のひとつとして知られ、この会戦によりドイツの敗北が決定的となった。

¹³ 回答者の証言をそのまま掲載した。

嫁がドイツ系で、息子家族がドイツに住んでいるので、ドイツから薬を持ってくる。自分はロシア系で、今は一人暮らしをしている。

甲状腺の病気にかかったのは 1975 年頃で、現在まで 30 年間も苦しんできた。心臓病などはそれ以前の 1963 年か 1965 年あたりから症状があった。子供の頃から病弱で、インフルエンザなど様々な病気にかかった。

核実験の影響で病気になったと感じている。実験の影響で孫も病気にかかっている。ひとは今年 14 歳になる女の子だが、生まれつき心臓が悪かった。1999 年、8 年前にドイツにて無料で手術した。ロシアでは同じ手術に 4 万ドルかかると言われ、カザフスタンでは同じ手術はできないと言われた。他の孫たちも皆病気にかかっている。手術した孫のことが特に心配だ。検査のため、数年毎にロシアに連れていかなければならない。次の検査は 17 歳になったとき、3 年後の予定である。

母は 92 歳で亡くなった。主人は運転手の仕事をしており、アバイ地区に行く機会が多かった。

セミパラチンスクに住んでいた 1952 年から 55 年頃、核実験についてのうわさを聞いたと思うが、地震かもしれない、などといったあいまいなものだったと思う。ラジオ、テレビなどは何もなかったから、正確なことは知らされなかったのだと思う。私自身も、1950 年代のことは 55 年も前のことだからよく覚えていない。

1960 年代か 70 年代から、気力がなかつたり、悪夢を見たりということがあった。具体的にいつ見たのかは覚えていない。地震、洪水など、災害の夢をよく見た。息子も主人も兄も亡くなったから、その影響で悪夢を見たのだろう。核実験と直接の関係はないのかもしれない。

主人はずっと病気で、薬を飲み続けていた。主人が亡くなったために昨年からは、被曝者手当として月 2700 テンゲもらっている。主人は運転手の仕事で実験場の近くに行くことが多かったためだ。

健康を祈っている。特に子供たちのことを心配している。子供たちが今現在病気にかかっていることが一番心配だ。戦争が起こらないように、子供たちが常に健康でいられるように、と願っている。

1958 年に結婚した当時は、ジェルノフカでクラブの会長¹⁴をしていた。主人も私も同じジェルノフカ村の出身だ。ジェルノフカでは、主人は機械修理の仕事をしていた。ここバラドリハに来て、主人は運転手、自分は店員になった。

¹⁴ 自治会館の管理人のような職業ではないかと考えられる。

アルマティで1972年から2年間、専門学校で勉強したが、核実験場周辺地域出身だからといって、特に差別された覚えはない。1981年にスモレンスク¹⁵に息子と一緒に行ったときは、セミパラチンスク出身であることを伝えるとロシア人に怖がられた。何を見たか、感じたか、などを聞かれたが、差別されたというわけではない。

バラドリハ4、女性、1941年生

現在は年金生活を送っているが、長年会計士として勤務していた。

最終学歴校名はセミパラチンスク工業専門学校の会計学部卒。

現在、息子と同居中である。

バラドリハで生まれ、1959年に専門学校に通うためセミパラチンスクに転居し、その後1961年～1969年までパプロダール州¹⁶に住んだ。1969年に再びバラドリハに戻り、現在までバラドリハ在住である。

1949年当時の家族構成は、両親、兄2人、姉、妹と自分の7人だった。父は1909年生まれで、1960年に糖尿病、高血圧が原因で亡くなる。母は1913年生まれだ。兄は1933年生まれと1935年生まれで、1人は2002年に糖尿病で亡くなっている。妹は1946年生まれでセミパラチンスクに住んでいたが、2001年に亡くなった。姉は1937年生まれで健在だ。バラドリハに住んでいる。

両親は村内で仕事をしていた。当時の住居は木造だった。当時は自分で野菜を作り、牛を飼ってミルクを飲んだ。パンも食べていた。戦後だったため生活は苦しかった。

現在の健康状態はまったくよくない。腎臓がんを患い、手術を受けたあとから家事もほとんどできない状態である。セミパラチンスクのがんセンターでも手術を受けた¹⁷。最後に診察を受けたのは1カ月ほど前だ。がん以外にも、不眠、高血圧、めまい、吐き気、全身倦怠感がある。1995年から高血圧の薬を飲んでいる。最近になって心臓病や胃腸、肝臓、関節、甲状腺も患っている。腰も痛い。

核実験のせいで、体の調子が悪くなったと思う。放射線に覆われた果物を食べ、水を飲んでしまった。子供だったので悪影響があることを知らなかった。

1949、1950年当初から、実験が核実験であることはうわさで聞いて知っていた。正式に知らされていたわけではない。実験の際には「爆発がある」という連絡はあった。正確な日時までは知らされていなかったと思う。あまりよく覚えていない。

¹⁵ ロシア西部の都市。

¹⁶ 実験場北西に近接する州。州都パプロダール。

¹⁷ ここで、がんのエコー写真を見せてくださる。

爆発があると外に出るよう指示された。学校の授業中にも外に出た。きのご雲を見た覚えはない。1960年代はセミパラチンスクに住んでいたのだから、見ていないのだろう。セミパラチンスクでは寮に住んでいた。寮の窓からきのこのような雲を見たような気もする。でもそれが爆発だったかどうかわからない。病気で記憶があいまいになっている。手術の後、耳も遠くなった。これまでに様々な炎症を起こし、インフルエンザにもかかった。倦怠感もある。精神的にも落ち込みがちだ。

核実験で多くの友人が亡くなった。以前はそれが核実験のせいであるとは思っていなかったが、自分が手術をしてからそう思うようになった。病院も病気にかかった人で混雑している。どこの病院も混んでいる。サービスもよくない。特に女性に対するサービスが悪い¹⁸。医者は肉を食べたほうが良いというが、お金が足りない。

公務員の給料が4月から32%上がった。年金も11000テンゲから14000テンゲになった。でも息子の仕事がないので、2人の生活をこの年金で賄っていかなければならない。

近々がんセンターで診察を受けなければならない。診察は全部無料だが、食事はあまりよくない。おいしくない。

普段の食事では、肉は1日1回しか食べられない。店（バザール）で食料を購入しているが、物価は高い。今日の昼食はボルシチだった。肉も入っている。昨日はハンバーガーを食べた。冬は光熱費がひとつき約5000テンゲかかる。暖房代だけでも3500テンゲする。今年はさらに高くなるのではないか。肉は1kgで500-600テンゲだ。果物も高い。年金も上がったが物価も高くなった。被曝者手帳を持っていても何ももらえない。

主人はアルマティ大学を卒業した。1969年、29歳のとき、心臓病で亡くなった。そのとき息子は3歳と5歳だった。息子のひとりと同居している。もう一人の息子は自分の家族と住んでいる。

バラドリハ5、女性、1939年生

現在は年金生活を送っている。

最終学歴は中学校卒。バラドリハ地区内の中学校を卒業した。

ロシア・リャザン州¹⁹のシャツクという町で生まれた。1947年に父が戦争から戻り、

¹⁸ ここで同席した保健師より、「近々新たな病院が建設予定である」との発言があった。

¹⁹ ロシア西部の州。州都リャザン。

父の友人家族とともにバラドリハ地区内のコンドラチェフカ村²⁰に転居してきた。1967年、結婚してバラドリハへ来た。

1949年当時の家族構成は、父、母、兄2人、弟との6人家族だった。父は1908年生まれで、1962年にぜんそくで亡くなった。母は1907年生まれで、1970年に梗塞で亡くなった。兄弟のうち1人はセミパラチンスクに住んでいる。両親は当時村内で仕事をしていた。

コンドラチェフカでは、転居してきた当時は土塀の家だった。1958年に木造の家を購入した。

質素だったので、食事のことはあまり思い出したくない。自分でパンを作って食べていた。転居してきた当初、家がなかったときはほとんど野菜を食べなかったが、その後は野菜とジャガイモを自宅で栽培して食べた。1956年から肉、野菜、鶏肉が食べられるようになった。1965年頃には生活が楽になった。

現在の健康状態は普通である。家事は自分で全部こなしている。一緒に住んでいた主人の母ががんで亡くなったが、最期まで自分で家事をしていた。何のがんかはよく分からない。

現在気になる症状は貧血と関節痛だ。仕事をしている間は、どこか痛いところがあればすぐに病院へ行ったが、仕事をやめてからは診察を受けていない。最後の診察は6年前になる。現在、薬は全く服用していない。1956年までは健康だった。体の調子が悪くなったのは1974年からだ。胃腸が悪かったこともあった。アバイ地区²¹に何度も行ったことがあるせいなのではないか。

今の病気は核実験のせいだと思う。証拠があるわけではないが、核実験の影響かもしれないと思う。放射線に覆われた果物などを食べたからかもしれない。

実験が行われていることは当初から知っていたが、悪影響があることは知らなかった。父に実験のことを聞いた。「カザフに住みたくない、ロシアに帰ろう」と父はよく言っていた。1961年に、はじめてこの実験が人体に及ぼす悪影響を知った。おぼの知り合いに軍人がおり、その人に教えてもらった。セミパラチンスクに住まないほうがいいと言っていた。

1949年頃、コンドラチェフカできのこ雲を見たが、その後の実験はあまり気づかなかった。1949年の実験のときは、子供だったので興味を持って外に出て見た。

²⁰ 回答者によれば、バラドリハから45kmに位置する村。

²¹ 実験場の南側を擁する地区。サルジャル、カイナル、カラウル等の村を含む。

1953, 54年頃、アバイ地区へ行くことが多かった。羊の毛を切りに行った。アバイ地区内の様々な地域に行った。若い女性だけが行った。

1968年からずっと、ひどい頭痛があり、鼻血もあった。高血圧も患っている。精神的な影響は特にない。

核実験のことは思い出したくない。一番恐ろしいのは、実験の悪い影響を知らせてもらえなかったこと。例えば、雨が降るときには家にいるように、と誰も言ってくれなかった。誰も悪影響があることを知らなかった。誰のせいにすれば良いのか分からない。ロシアに住んでいるおじは、実験のことをよく知っていて、一度もカザフへ来なかった。当初は何も知らず、地震だと思っていた。

主人の仕事は運転手だった。主人はバラドリハで生まれ、ずっとこの村に住んでいる。主人は目が悪く耳も遠い。体の調子があまりよくない。仕事ができなくなってしまった。

核実験を恨んでいる。核実験には意味がない。子供たちは皆、実験の影響で病気だ。自分の子供は2人、1人はロシアにおり、1人はバラドリハに住んでいる。ロシアに住んでいる子供のほうはそれほど病気がちではない。

2005年8月24日 ノヴォポクロフカ村

ノヴォポクロフカ1、女性、1939年生

現在は年金生活を送っている。最終学歴はベラルーシの中学校卒。

ベラルーシで生まれ、1960年にノヴォポクロフカに来た。

1949年当時の家族構成は、姉と自分の2人だ。姉は1922年生まれで、1990年に肝臓の病気で亡くなった。

最初の住居はどのようなものだったか覚えていない。40年前に建てられた現在の家は木造だった。

当時の食事内容は、肉、パン、ジャガイモなどで、野菜は食べなかった。ミルクも飲まなかった。

現在の健康状態はあまりよくない。家事は全部自分でやっているが、子供たちも手伝ってくれる。病気や症状としては、心臓病、高血圧、関節や腰の痛み、めまい、全身倦怠感など。最後に診察を受けたのは2年前の2003年だ。様々な薬を飲んでいる。体の調子が悪くなったのは2002年に足の骨折をしてからだ。現在の病気は核実験の影響だと思う。

核実験を知ったのは1990年代だ。家が揺れたことを覚えている。爆発は見えていない。

詳しいことは覚えていない。ノヴォポクロフカに来てめまいがするようになった。風邪をひきやすくなった。悪夢を見ることがある。気力がなくなった。光や大きな音が怖くなった。ノヴォポクロフカに引っ越してからいらいらすることが多かったので、そのためではないかと思う。

実験はとても恐ろしいものだ。私だけでなく、他の住民も苦しんでいる。今のほとんどの病気は実験の影響だと思う。子どもたちの記憶力がとても悪くなった。

ノヴォポクロフカ 2、女性、1940 年生

現在は年金生活を送っている。最終学歴は中学校卒。

コゾクドゥク²²で生まれた。1960 年にノヴォポクロフカに転居してきた。

1949 年当時の家族構成は、姉、兄との 3 人兄弟だった。父は戦争から帰ってこなかった。母も亡くなっていた。兄は 1931 年生まれで、現在はバラドリハ村に住んでいる。

当時住んでいたのは土の家だった。食事は自分でパンを作ったり、牛を飼いミルクを取ったりした。

現在の健康状態は普通だ。最後の検診は昨年で、がんセンターで受けた。薬は全く服用していない。頭痛や目の病気、関節・腰の痛み、胃の病気などを患っている。2001 年から体調が悪くなった。それまでは元気だった。核実験のせいなのかどうかは分からない。

実験の影響で主人も自分も病気だ。子供の 1 人は精神的な病が原因で 14 歳のとき自殺した。

隣人たちのうわさで 1953 年頃、実験が「人体に悪影響を及ぼす爆発である」と知った。爆発自体は見えていない。家が揺れたのを感じただけだ。

実験の影響で主人の親戚が皆亡くなった。その他の多くの親戚、友達も亡くなっている。核実験が行われていた当時、体調は悪くなかった。2001 年まではずっと悪くなかった。

主人はヴォスクリシェノフカ村²²で 1942 年に生まれた。主人は酒もタバコもやらないのに、病気はどこから来るのか。実験のせいだ。娘も 2 人とも病気だ。実験の影響だと思う。

²² 回答者によれば、ノヴォポクロフカ近郊の村。

ノヴォポクロフカ 3²³、男性、1929 年生

現在は年金生活を送っている。最終学歴はセミパラチンスク教育大学卒。

セミパラチンスク生まれ。1944 年よりノヴォポクロフカに住んでいる。

1949 年当時の家族構成は妻と 2 人だった。住居はノヴォポクロフカに来て、両親と一緒に 1960 年に木造の家を建てた。

戦争のことは思い出したくないが、当時の食料は野菜、パン、たまご、魚などだった。ミルクも飲んだ。1950 年代にも 1 日 2 リットル程度飲んでいたと思う。

現在の健康状態は普通だ。最後に検診を受けたのは 1980 年代だ。高血圧の薬は飲んでいる。関節の痛みがある。時々心臓も痛い。1960 年より、体の調子が少しずつ悪くなり始めた。現在の病気は核実験の影響だと思う。父、母はがんで亡くなった。

最初に感じた実験は 1951、52 年頃だったと思う。家が揺れたとき、悪い影響があるとは知らなかった。教員をしていたので、学生と一緒に外に出た。核実験であることを知ったのは、1980 年代の終わり頃だ。

きのこ雲は見たことがない。爆風は感じた。ズボンがはためくほどの爆風だった。感じたのは 1960 年代か、1958、59 年ぐらいだったと思う。最初の実験が 1951、52 年だったが、1954、55 年頃に歯が痛くなり始めた。実験の影響ではないか。現在では少しはよくなった。

核実験には良い点もあるが悪い点もあると思っている。実験場には良い点などなく悪い点ばかりだったが、「核兵器」ではなく「核」には原子力としての平和利用など、良い面もある。実験を行っていた当時は、核兵器にも必要性があったのではないかと私は思う。

13 歳の頃から仕事をしている。運転手をしていた。通信教育で大学を出て、1950 年から物理の教員としての仕事を始めた。

ノヴォポクロフカ 4²⁴、女性、1925 年生

現在は年金生活を送っている。最終学歴はセミパラチンスク教育大学卒。

ジェルノフカで生まれた。1931 年よりノヴォポクロフカで主人と一緒に住んでいる。

1949 年当時の家族構成は主人と 2 人だった。1931 年より以前、両親と一緒にの頃から木造の家に住んでいた。

²³ ノヴォポクロフカ 4 の配偶者。

²⁴ ノヴォポクロフカ 3 の配偶者。

夫と同様、当時の食料は野菜、パン、たまご、魚などだった。ミルクはノヴォポクロフカに来てから飲まなくなった。現在も飲んでいない。

健康状態は普通だが、よくめまいがする。めまいがしたときには横になってすぐマッサージをする。首を回す体操を左右 30 回ずつ行う。朝起きてすぐ、30 分間ほどかけてマッサージをする。これまでに手術を 4 回受けた。最後の手術は昨年だったので、最後に検診を受けたのも昨年だ。薬をたくさんもらっている。高血圧、胃の病気、腸の病気などを患っている。関節も時々痛む。1950 年代には肝臓も患っていた。

どこかの新聞に日本の医者の記事が載っており、それを参考に 5 年ほど前からつぼ押しのようなマッサージをしている。耳は 2 回手術し、皮膚がんはがんセンターで治療した。手術したところと同じ場所にまた症状が表れた。今も塗り薬をぬって自分で治療している。

全ての病気は実験のせいだ。1958 年頃に実験のことを知った。きのこ雲は見えないが、揺れを感じた。外に出ないほうがいいという連絡があったので、屋内にいた。とても見てみたかったが、我慢した。姉は我慢しきれず外に出た。

大きな音などが嫌なので、9 年前からほとんどテレビを見ない。見たい芝居などは音なしで見る。映画はほとんど見ない。色々な音が怖い。錠剤を飲めない。

これからは実験がないように、戦争がないように祈っている。実験が二度と繰り返されないように。平和を祈っている。

戦争の頃は大学生で、3 年間暖房のない寮に住んだ。パンだけを食べ、凍っている水を飲んだ。たくさん服を着て寝た。一日の食事はパン 500g と水、といった生活だった。

今後は戦争や核実験のような恐ろしいことがないように。戦争のためにちゃんと大学を卒業できなかった。通信教育を受けながら仕事をした。

3 人のいとこが戦争で死んだ。兄夫婦も戦争で亡くなった。

夫婦で教員をしていた。私がロシア語の教師で、主人は物理を担当していた。

被曝者手当をもらっている。月 1700 テンゲを夫婦それぞれに受け取っている。

ノヴォポクロフカ 5、女性、1939 年生

現在は年金生活を送っている。最終学歴はノヴォポクロフカ中学校卒。

ノヴォポクロフカで生まれ、現在までずっとここに住んでいる。

1949 年当時の家族構成は、父、母、兄、弟と自分の 5 人だった。父は 1905 年生ま

れで、1955年に亡くなった。母は1911年生まれで、2002年に91歳で亡くなった。兄は1937年、弟は1948年生まれだ。兄、弟は健在だ。

1950年代は土の家に住んでいた。

当時の食事内容は、ジャガイモ、野菜、パン、ミルク（1日500ml）などだった。肉、鶏肉もたまに食べることがあった。ミルクは今も飲む。

現在の健康状態はよくない。甲状腺の病気がある。家事は夫婦ですべてやっている。やせたり太ったりする。熱はない。歯がほとんどないが、食欲はある。不眠、頭痛、めまい、倦怠感、寝汗などの症状もある。

最後の診察は今年1月、カザフ放射線医学環境研究所で行った²⁵。頭痛と不眠のための薬を飲んでいる。高血圧、心臓病、甲状腺、胃の病気、関節の痛み等もある。

1985年から体の調子が悪くなった。1989年に甲状腺の病気と診断された。現在の病気は核実験の影響だと思う。

1953、54年頃、授業で先生が、実験が核実験であることを教えてくれた。しかし悪い影響があるとは言わなかった。1960年頃、悪い影響があることをうわさで聞いた。1958年には、アバイ地区へ羊の毛を刈りに行って初めてきのご雲を見た。アバイ地区のアチ²⁶というところに行き、白いきのご雲を見た。まさにきのこの形をしていた。爆風はアバイ地区でもノヴォポクロフカでも感じた。ほこり、雨はノヴォポクロフカで感じた。雨については、汚い雨だと聞いた。

1959年頃胃が痛くなり、現在まで続いている。1972年にがんセンターで手術を受けた。1949年から、いらいらして怒りっぽくなった。

実験は体にとっても悪い影響を及ぼす。もちろん、実験のような恐ろしいことがないように、皆さんが頑張るべきだ。被曝者手当は1500テング×2だ。主人も戦争に参加したから手当をもらっている。今の主人とは10年間一緒に住んでいる。お互いの配偶者が亡くなってから一緒に住むようになった。

（ご主人の証言：ドイツ人と戦争をした。写真の勲章²⁷はワルシャワで戦争したときの勲章だ。退位したときは、下から三番目の階級だった。）

²⁵ ここで、インタビュアーのひとりであるタルガット先生の診察を受けたことがある、と発言された。

²⁶ 回答者によれば、カラウルから60km西（爆心に近い方向）に位置する村。

²⁷ ここで、部屋に飾っていた写真を見せてくださる。

2005年8月27日 カザフ放射線医学環境研究所

研究所 1、男性、1945年生

モスクのイمام²⁸をしている。最終学歴はカラガンダ²⁹専門学校卒。

1955年までは中国・ドゥルブジン村³⁰に住んでいた。1955年にズナメンカに移住してきた。1969年にブケンチに転居し、現在まで居住している。

1949年当時の家族構成は、父、母、兄と自分の4人家族だった。父は1915年生まれで、1979年に胃がんで亡くなった。母は1925年生まれで、1999年にがんで亡くなった。何のがんかは不明だ。兄は1934年生まれで、1991年にがんで亡くなった。

当時の住居は土の家だった。さまざまな家畜を飼って生活していた。当時の食事は肉、ミルク、さまざまな種類の野菜、ジャガイモなどだった。食事内容はよかった。ミルクは一日1リットル飲んでいた。

治療を受けたばかりなので現在の健康状態は良い。今日か明日退院する予定だ。高血圧、心臓病、関節の痛み、甲状腺などを患っている。体の調子が悪くなったのは2000年からだ。これらの病気は核実験の影響だと私は確信している。

核実験だと知ったのは1988年で、ネバダ・セミパラチンスク運動によって知った。きのこ雲は見えていないが、1956年、ズナメンカに住んでいた頃、初めて爆発を感じた。家が揺れた。皆家を出た。当時は元気だった。お酒をよく飲むせいか、元気だった。だから皆さんも、セミパラチンスクへ来るときはお酒をたくさん飲んでください。

一家族の中で3人の子供が死んだのを見たことがある。核実験の影響だと思う。以前はこんなことはなかった。現在、村民の病気のほとんどは核実験の影響だ。年寄りだけでなく、若い人の病気もそうだ。今でも、実験の影響で水が悪い。きれいな水が必要だと思う。様々な薬と治療が必要だ。病院に行っても薬がないし、薬を買うにもお金がない。薬を無料にしてほしい。村には男性医師が1人しかいない。女性医師と、女性の看護師の3人で診察を行っている。ブケンチ村の人口は約1500人だ。どこか調子の悪いところがあったらすぐに病院に行くようにしている。

年金はまだ若いからもらっていない。以前の制度では55歳からもらえたが、現在では63歳にならないともらえない。運転手としてブケンチで仕事をしていたが、1年勤

²⁸ 回答者によれば、イスラム教のモスクで最高責任者にあたる役職。試験に合格し、資格を取得しなければならない。

²⁹ カザフスタン中部・カラガンダ州の州都。文化の中心地でもあり、カラガンダ大学をはじめ工科、医学、教育の各大学や多数の研究所、劇場、博物館、植物園などがある。

³⁰ 回答者によれば、ウルムチ（中国新疆ウイグル自治区の区都）近郊に位置する村。

続年数が足りず、55歳で年金がもらえなかった。1969年から1995年まで働いていた。自分の周りの同じ年齢の人はもらっている。

被曝者手帳を持っているので、研究所³¹で良い治療を受けられる。村では受けられない。治療を受けてから調子が良い。明日、検査を受けて結果が良ければ退院する。研究所の医師たちに感謝している。体の調子がよくなった。

ズナメンカの1955年頃の人口は約1000人だったが、現在は2000人ほどで、ブケンチより多い。

父方の親戚が住んでいたのので、1955年に中国からカザフスタンへ家族4人で移住して来た。今も遠い親戚が中国に住んでいて、連絡を取って行き来することがある。中国語は、子供の頃は覚えていたが、今はほとんど忘れてしまった。

現在の家族は妻と息子2人と娘2人だ。子供たちは皆別々に、セミパラチンスクに住んでいる。孫は2人いる。結婚したのは1969年で、妻はブケンチ村で現在まで教員をしている。

健康を望む。カザフの人間はメガネをかけることがほとんどないのに、うちの子供たちは視力がよくない。娘の1人には結石がある。

人生で一番楽しかったことは、子供の成長だ。皆それぞれに結婚した。子供たちが健康であればそれが一番うれしい。妻もいつも私のそばにいてくれて幸せだ。

農業をしている土地は、結構な広さの土地だ。ジャガイモ、トマト、キュウリなどを作っている。収穫した野菜は自分で食べたり、子供にあげたりする。妻は教員をしており、月給は28000テンゲだ。この中には1700テンゲの被曝者手当も含まれている。自分は手当を受けていない。妻だけが受け取っている。妻は中学・高校でカザフ語の先生をしている。村の学校の先生は給料が高い。

自分はモスクのイマムとして月給6000～7000テンゲもらっている。モスクは昨年建てられたばかりだ。村人のお金を集めて、前村長もお金を出し、以前は幼稚園だった建物を改修した。セミパラチンスクには大きなモスクがある。

中国にいたときからアラビア語を勉強し、カザフスタンに来てからも学校で勉強した。そしてイマムの資格をとった。アラビア語を勉強したことで、コーランが読める。イマムは経を唱えなければならない。1日5回、メッカの方向を向いて礼拝する。礼拝して体の調子がよくなった。旧ソ連時代も、年寄りには礼拝を続けていた。若い人はやらなかったが、ソ連政府から禁止されていたわけではない。そうはいつでもやはり、独立して

³¹ 「カザフ放射線医学環境研究所」を指している。

自由になった。アラビア語の小さな学校もあるし、大学でも学べる。

イスラム過激派が台頭したイラクをアメリカが攻撃しているが、イラク戦争ではたくさんの方が死んでいる。戦争に意味はない。これは私見だが、アメリカが狙っているのはイラクの石油であり、石油戦争だ。

核実験であることを知る前は、揺れや爆発を兵器の演習だと思っていた。皆がそううわさしていた。村の人が次々と病気になっていったときには、治療を受けにセミパラチンスクに連れてきた。実験のとき、軍人をたくさん見たし、兵器の演習である、という連絡もあった。

2006年8月19日 カザフ放射線医学環境研究所

研究所1、女性、1941年生

最終学歴は10年制学校。

被曝者手帳は1991年頃取得した。

セミヤルカ生まれ。1963年に結婚してクリビンカに転居し、現在まで居住している。

1949年当時はセミヤルカにおり、父、母、兄と自分の4人家族だった。父は1968年に胃がんで死去した。母も父の一年前の1967年、同じく胃がんで亡くなった。兄は1998年に心臓病で亡くなった。

当時の住居は木造の家だった。牛を飼っていたので牛乳を飲んだ。現在の健康状態は、甲状腺と高血圧の疾患があるが、それ以外の病気はない。薬もそれほど飲まない。今回研究所に入院するまでは、1回も入院したことはなかった。核実験の健康への影響はあると思う。

8～10歳の子供の頃³²、実験が悪い影響を持つことを知った。当時、その実験が核実験であることを大人から聞いて知っていた。様々な人から、原爆の爆発時の形に似ている、などのうわさを聞いた。

地面の揺れや、爆風があった。興味があったので爆発を見てしまった。地震のように地面が揺れたり、風が吹いたりした。軍人がきて大人に何か言い、大人（親）が子供に言った。車で村内の郊外に行き、上に何かをかぶせられた。最初の1、2回は何も見なかったが、次から見てしまった。きのこのような形をしていて、最初は白かったものが、赤くなった。爆発を全部で4～5回見た。下のほうは赤く、上のほうは白かった。とても大きいと思った。でもその頃は子供だったから、はっきりとした大きさは分からない。

³² 1949-1951年頃に当たる。実験開始時期に相当する。

10階建てのマンションぐらいだったと思う。

2日前に軍人が来て、親に実験があると連絡していった。それから、家の中のものが壊れないように片付けたりして準備した。最初の実験のときから、毎回連絡があった。別の村へ避難したことはない。爆風で窓がよく割れたが、村長が何とかしてくれた。政府が修理してくれた。地面を這うような風だった。小さい地震のような感じだ。人が落ちるようなことはなかった。子供だったので怖くはなく、興味があった。

広島のこと知っている。テレビ等で、大人になってから見たり聞いたりした。1980年代か、1977～78年ぐらいに知ったのではないと思う。私達も広島のことをとても残念に思う。自分達の受けた実験の被害が広島と一緒に知っている。

ネバダ・セミパラチンスク運動にももちろん賛成していた。村に住んでいたのも、特に運動には参加していない。でも心の中で応援はしていた。

研究所 2、女性、1947年生

最終学歴は専門学校卒。

出身はアヤグスである。1956年にベゲン村に転居し、現在まで居住している。

1949年当時の家族構成は、両親と自分だった。父は1905年生まれで、1997年に胃がんで死去した。母は1914年生まれで、1983年に心臓病で亡くなった当時の住居は木造の家だった。

現在の健康状態はあまりよくない。高血圧、心臓病、頭痛などを患っている。記憶力が落ちた。1966年から病気にかかり始めた。現在の病気はもちろん核実験によるものだと思う。なぜなら、それまでは何ともなかったのに、核実験後に病気にかかり始めたからだ。学校の授業中でも、先生方が外に出るように指示し、みんなで出た。アヤグスからベゲンへ引っ越した1956年から核実験をみた。あまり風は感じなかった。

きのこ雲を見た11、12歳の頃、頭痛やめまいがした。血圧も高かった気がする。子供だったから分からなかったが、目が赤くなったり、めまいがしたりした。爆発を見てから一週間程度その症状が続いた。その後、薬を飲み始めた。精神的な影響は特にない。

実験の時ははじめに雷があって、その後きのこ雲が現れた。地面が揺れ、窓が割れたりして家にいるのは怖いので外に出た。村の郊外のほうへ行った。子供同士で、興味を持っていろいろと話した。爆発のことは単なる軍の実験であると聞いていた。身体に影響

響があるとか、核実験であるということは知らなかった。スレイメノフの運動³³が始まって知った。

研究所 3³⁴、女性、1946 年生

最終学歴はサルジャルの 10 年制学校卒。

サルジャル生まれ。1968 年に結婚してセミパラチンスクに転居した。当時、3 家族に 1 人は自殺者がいた。1 家族が約 5 名とすると、15 人に 1 人は自殺していた計算になる。21 歳ぐらいの子が自殺したのを知っている。自殺の理由は誰にも分からない。子供の頃は年をとっている人だけが亡くなっていたのに、1 家族のうち 2 人も自殺した、などと聞くようになってしまった。

実験のときは家の中にいたのではなく、親の指示で外に出た。子供が興味を持って面白がっていたので、親が心配していた。

自分の子供たちのほうが、自分より病気がちである。実験後、病気が増えた。1976 年頃から高血圧、肺炎、胃の病気などを患うようになった。頭痛、身体がだるいなどの症状があったために病院へ行き、このような高血圧などの病気があることが分かった。今はさらに多くの病気をもっている。これらの病気は核実験の影響だと思うし、周りの人からもそう言われる。昔はカザフ人にはそんなに病気はなかった。今後の世代の健康についても考えなければならない。

8 年前、主人が心臓病で亡くなった。子供は 3 人いる。

サルジャルの 10 年制学校卒業後、セミパラチンスクの工場で仕事をしていた。服のタグ（会社名などの入ったもの）をつける仕事をしていた。学校を卒業してすぐセミパラチンスクに来た。

娘が甲状腺の病気を持っているので、とても心配だ。33 歳、30 歳、26 歳の 3 人の娘がいる。上の 2 人は結婚している。

若いときは何も考えなくてよくて、楽しかった。若い世代が元気であることを祈っている。

サルジャルには帰りたくない。昔住んでいたところなのだから、もちろん懐かしいとは思ふ。でも帰りたとは思わない。今サルジャルに住んでいる人はかわいそうだ。多分、村の人口の 80% は病気にかかっている。政府は頑張っていて、様々な保障も受け

³³ セミパラチンスク核実験場閉鎖の原動力となったネバダ・セミパラチンスク運動を指す。スレイメノフはその運動の指導者。オルジャス・スレイメノフ。

³⁴ 質問票への回答は行わず、インタビューのみ実施した。

られるが問題もある。年金が少ないこと、失業問題、給料が少ないことなどだ。大学卒でも仕事に就けない。

核実験を実施したロシアのことを恐ろしい、といえなくもないが、憎むことはない。核実験には、良い面もあるし悪い面もある。国のためには良い面もあるが、住民のためにはもちろん悪いのだから、第一に住民のことを考えるべきだ。

2006年8月21日 アクー村

アクー1、女性、1937年生

現在は年金生活を送っている。

最終学歴は10年制学校卒。

生まれはセミパラチンスクだが、生後10日でセミヤルカに転居し、1955年に結婚するまで住んでいた。結婚してセミョーノフカに住み、その後1962年よりアクーに住んでいる。

1949年当時の家族構成は、父、母、兄と自分の4人家族だった。母は1909年生まれで、店員をしていたが、1986年に亡くなった。死因は不明だ。病気だったが入院しなかった。父は1941年に亡くなった。兄は1939年生まれで、健在でセミパラチンスクに住んでいる。

セミヤルカの家は木造だった。食べていた物は、牛を飼っていたので、ミルク、肉、トマト、キュウリなどで、果物は食べなかった。牛乳は自分の農場のものを1日約1リットル、加熱したものを飲んでた。

現在の健康状態はよくない。食欲はある。肝臓の病気、胃の病気、甲状腺の病気があるが、薬は飲まない。耳が遠くなって、よく聞こえない。2004年から病気にかかり始めた。実験場の近くに住んでいたため、現在の病気は核実験の影響だと思う。仕事をしていたときは仕方なく、実験場近郊に住んでいた。店員として15年働き、その後銀行に勤めた。現在の年金は9300テンゲだ。

1990年代、多分1995年頃、被災者への手当などの保障が始まった頃に実験が核実験であることを知った。

1948、49年頃、最初の爆発を見たときはセミヤルカに住んでいた。音がとても大きく、きのこ雲が出て、とても強い風があった。人々は怖くて逃げた。単に外に出ただけで、郊外には行かなかった。

爆発があると光が強く、周りのものが何も見えなかった。強い風と光があったが、雨

は降らなかった。窓が割れた。

悪夢を見たことはあるが、その他の心的な影響はない。

最初の爆発は子供の頃で、私は10歳でセミヤルカに住んでいた。大人に爆発について聞くと、マイスキー地区³⁵で行われている、と聞かされた。爆発を自分の目で見てはだめだと言われていたので、見たことはなかった。何らかの実験であると聞いていた。大人になってセミョーノフカに転居してからは、自分の目で見た。最初に外に出たとき、とても大きな音がした。大きなきこ雲を見た。爆発はマイスキー地区の方向であると思っていた。とても熱い爆風が来た。誰かが「もう終わりましたので家に戻ってください」と言ったので帰った。

核実験が行われた意味はなかったと思う。たくさんの方が悩んでいた。どうしてロシア領土内でしなかったのか、と思う。二度と繰り返さないでほしい。これからの世代が二度と経験しないですむように。若い世代の病気が多いのは核実験のせいだ。自殺者も多い。1962年にアクーに来てからは、実験について何も経験していない。

病気にかかれば、セミパラチンスクの検診センター³⁶に行くが、そうするとお金がかかる。よい薬はないし、薬を買うのにお金がかかる。被災者に対する保障をもっと厚くしてほしい。一度だけ、1989、90年頃、約20,000テングもらった。ロシアのルーブルで受け取った。被災地区に住んでいたから、補償金という名目でもらった。ロシアが出したお金だ。

アクー2、女性、1935年生

7年間しか学校に行っていない。その後学校の掃除をする仕事をしていた。

ジャンブル生まれ。1953年に結婚してキジルアガシュへ転居した。1961年からはポドプスクに住んでいた。1996年よりアクーに住み、今年で10年になる。

1949年当時の家族構成は、父、母、兄2人と自分の5人家族だった。父は1972年に老衰のため亡くなった。母は49歳のとき胃の病気で亡くなった。食べられなくなって亡くなった。上の兄は1995年に亡くなった。第2次世界大戦のせいで病気になったためだ。下の兄は1932年生まれで、49歳のとき馬に乗って川から落ちたため亡くなった。

両親は牧畜を職業としていた。牛などを飼育していた。当時の住居は土の家だったが、

³⁵ 実験場の北西、アクーと実験場の間に位置する地区。

³⁶ 「セミパラチンスク病理診断局」を指すと考えられる。

周りには木造の家もあった。

肉はあまり食べなかった。らくだを飼っていたので、らくだのミルクを飲んだ。一日 200ml 程度を加熱して飲んだ。

11 人の子供を産んだが、今生きているのは 7 人のみだ。男の子が 3 人、女の子が 1 人亡くなった。

心臓の病気を患っている。薬を飲んでいる。甲状腺の異常を言われているが、症状は感じていない。1993 年から病気にかかり始めた。核実験の影響だと思う。

爆発を見たことがある。事前に飛行機が飛んできて、今日爆発があると知らせた。大きな爆発を 4 度キジルアガシュで見た。よく覚えていないが、毎回連絡があったと思う。大きな爆発が 4 度で、他にもあったかもしれないが覚えていない。窓や戸を閉めるように、という連絡があった。怖かったので、「生きてるか」とお互いに聞きあった。光が見え、熱を感じた。地震のように揺れ、動物が鳴いたりした。ポドプスクでは、きのこ雲だけ見たことがある。

飛行機からの連絡で、「クルチャトフでの実験」と言っていた。単なる実験だと思っていた。核実験だとは知らなかった。当時ポドプスクには 37 家族が住んでいた。キジルアガシュに食べ物がなくなったので、皆でポドプスクに移住した。

爆発のとき、揺れのせいで家の壁が落ちた。当時、一軒の家に 7 つの家族と一緒に住んでいた。何の爆発か知らなかったので、「死ぬかもしれない」と話した。ほこり、光、揺れがあった。ベッドの下に隠れた。実験の時間は全部で 30 分から 1 時間ぐらいだったと思う。

実験の影響で 1957 年頃から髪が抜け、頭痛もある。今ではそれが核実験の影響だと知っているが、昔は知らなかった。1992 年頃に知った。

アクー3、女性、1936 年生

専業主婦をしている。

ポドプスク生まれ。1994 年からアクーに住んでいる。

1949 年当時の家族構成は両親と自分の 3 人だった。父は 90 歳のとき胃がんで亡くなった。母は 1975 年に肝臓の病気で亡くなった。両親とも村で仕事をしていた。当時の住居はレンガ造りの家だった。

当時の食べ物は、牛乳、肉、バター、ポテトだった。牛を飼っていたので、一日 200ml のミルクを加熱して飲んだ。

健康状態はあまりよくない。核実験の影響で、歯がもうない。2004年にセミパラチンスクの検診センターで健康診断を受けた。高血圧で、薬を飲んでいる。骨の病気もある。目も悪くなった。胃の病気、頭痛もある。2000年から病気にかかり始めた。現在の病気はすべて核実験の影響だと思う。

孫の1人は足が動かないが、これも核実験の影響だと思う。

1957年に初めて爆発を見たときはポドプスクに住んでいた。とても赤く、強い爆発だった。壁が落ちたり、物が壊れたりした。娘は当時8ヶ月の乳児だったが、44歳のとき胃がんで亡くなった。息子は41歳のとき心臓病で亡くなった。娘の子供は2人いるが、そのうち1人は足が悪い。

病気で家を買うお金もない。主人は1994年に心臓病で、核実験の影響で亡くなった。

アクー4、女性、1936年生

最終学歴は10年制学校卒。

アクーで生まれ、現在まで居住している。

1949年当時の家族構成は、母、姉、弟と自分の4人家族だった。父は1947年に胃がんですでに死去していた。母は1977年に死去した。姉は1928年生まれで、1994年に糖尿病で亡くなった。弟は1947年生まれで、現在はウスチカメノゴルスクに住んでいる。

当時の住居は木造の家だった。

当時の食べ物は牛乳、肉などだった。一日200mlの牛乳を加熱して飲んでいた。

現在の健康状態はよくない。特定の病気があるわけではないが、食欲低下、不眠、頭痛、めまい、寝汗、関節の痛みがある。昨年セミパラチンスクの検診センターで健康診断をした。薬を飲んでいる。具体的に何の病気かは分からないが、高血圧、心臓の痛み、胃の痛み、頭痛などを感じる。甲状腺の異常はない。1996年から病気にかかり始めた。実験当時水を飲んだし、爆発も見たので、現在の病気は核実験の影響だと思う。

1950年代に学校で核実験のことを先生から聞いた。1951年に初めて爆発を見た。爆風があった。ほこり、熱を感じた。雨にあたったこともある。きのこ雲も自分の目で10回ほど見た。1959年には頭に何かできものができて、手術した。今も痕が残っている。がんではないかと思う。

子供も皆病気なのは、核実験のせいだと思う。1962年生まれで現在44歳の長男の足が動かない。

実験については事前に学校で説明があった。爆発があるときにしなければならないこと、例えば、外に出なさい、戸や窓を全部閉めなさい、などの説明を受ける授業があった。何の爆発かは知らなかった。軍の実験かと思っていた。核実験であると知ったのは、いつ頃だったか覚えていない。

小さい湖があって、そのそばで牛を飼っていたが、その向こうにきのこ雲が見えた。とても大きかった。木の高さよりももっとずっと高かった。

アクー5、男性、1936年生

最終学歴はカレッジ³⁷卒で、専門は農業だった。ペトロパブロフスク³⁸の大学を2年で卒業している。

アクーで生まれ、現在まで居住している。

1949年当時の家族構成は母、兄、弟2人と自分の5人家族だった。母は1998年に事故で亡くなった。兄は1934年生まれで、弟の1人は1938年生まれだ。1989年に胃がんで亡くなった。もう1人の弟は1942年生まれだ。父は第2次世界大戦時にスターリングラード³⁹で亡くなった。

母は学校を掃除する仕事をしていた。当時の住居は木造の家だった。

当時の食べ物は、ジャガイモ、野菜などだった。牛を飼っていたので一日200～300mlの牛乳を飲んだ。

現在の健康状態は普通だ。肺の病気で一度入院したことがある。キルギスの病院に1976年に行った。親戚の医者が出たのでノヴォシビルスク⁴⁰にも行った。最近は検診を受けていない。1996年に貧血を指摘されたことがある。高血圧は、今はおさまっている。薬はほとんど飲まない。1968年から病気にかかりはじめた。現在の病気が核実験によるものかどうかは分からない。

1949年8月の爆発⁴¹を見た。最初にマイスキー地区の方向で、ここから約8kmのところ⁴²から光が見えて、揺れがあった。ほこりや爆風があったかどうかはよく覚えていない。当時13歳だった。光ときのこ雲と揺れがあった。

³⁷ 2年で卒業しているため、日本の短期大学に当たると考えられる。

³⁸ カザフスタン北部、北カザフスタン州の州都。ロシアとカザフスタンを結ぶ交易の中心地として発展した。

³⁹ ボルゴグラードの旧称。ロシア南西部、ボルゴグラード州の州都。

⁴⁰ ロシア・西シベリア南部の工業都市。シベリアの文化の中心。

⁴¹ 旧ソ連が実施した最初の核実験を指していると思われる。

⁴² 回答者の証言をそのまま掲載している。

1951年には軍人が来て、郊外に移動し、爆発を見ないようにと言った。この爆発のときは爆風があった。爆発を見たのは1949年と、1951、52年頃の2度だけだ。2度ともきのこ雲を見た。1954、55年頃にはカレッジ進学のためペトロパブロフスクへ行ったので、爆発を見なかった。卒業後は当初エンジニアをしていたが、のちに技術科の教員になった。

特に1949年の爆発をよく覚えている。とても大きなきのこ雲だった。初めて珍しいものを見た、と思った。核実験だとは知らなかったから怖くはなく、面白かった。

1951年の爆発は軍人が来て知った。何のための爆発かは知らなかった。窓や戸を開けて郊外へ行くように、といった指示があった。年を取った人々は車に乗せられて、どこかへ行った。若い者は単に外に出た。

核実験の影響についてはよく分からない。私には直接影響がないように思う。弟や兄には影響があるのかもしれない。

1949年のきのこ雲は、アクーのほうへ流れてきた。クリビンカとセミヤルカの間を通った。クリビンカやセミヤルカでは、壁が落ちた、と聞いた。アクーでも揺れはあったが、壁が壊れるほどではなかった。1949年の爆発のときは、実験があることを何も知らされていなかった。爆発の後も、誰も噂話などしなかった。ちょうど外を歩いていたときに見た。とても明るくなかったが、気付いた人はあまり多くなかった。

2007年8月26日 マイスコエ村

マイスコエ1⁴³、女性、1937年生

最終学歴はウスチカメノゴルスク商業専門学校卒。

1955年6月28日にロシアからマイスコエ村へ、両親と弟とともに移住してきた。父は1910年生まれで、第2次世界大戦中はロシアで戦ったが、1964年に心臓病で亡くなった。母は1917年生まれで、1994年に父と同じ心臓病で亡くなった。母は長い間病気をしていた。1964年にのどのがんになり、パブロダールの病院で見てもらったが、戻ってからも「死ぬ」と言っていた。食事が出来なかったので、水やジャガイモなどを少しずつ食べさせるなどして必死に看病した。その後、少し回復した。弟は1944年生まれた。

当時の食事はミルク、牛肉、ジャガイモ、様々な種類の野菜などだった。ミルクは一

⁴³ マイスコエ2の配偶者。車椅子でインタビューに応じてくださる。「このような格好で恥ずかしい」と発言された。

日 1 リットルほど飲んでいて、今でも夫婦 2 人で 3 リットル飲んでいる。

4 月に骨折のため手術を受け、立てなくなったが、野菜などをたくさん食べるので足以外は健康だ。薬も飲んでいる。足が痛くなったのは 5 年前（2002 年）だ。病気になったのは核実験のせいだと思う。

1956 年の 6 月末か 7 月はじめに爆発があつて、窓に布などをかけていたが、窓ガラスが割れて、全部自分に落ちてきた。この村の中の別の家にいた。怖くて、机の下に逃げた。皆が私の家⁴⁴に集まっていたので、はっきりとした年月を覚えている。当時の家に 38 人もの村人が集まっていた。

爆発があつたので、きのこ雲を見たくて外に出たが、軍人に「中に入れ」と言われた。

村の郵便局長として働いていた。会計などを担当し、村の有力者だった。だから記憶力がよく、はっきり覚えている。良く覚えているので、核実験について本を書いてください、と言われるが、もう今は書けない。

爆発のあと、ほこりは少し感じたが、雨はなかった。私の家の屋根は落ちなかったが、村の別の家の屋根が落ちた。実験後、いらいらして怒りっぽくなったと思う。

窓ガラスが割れたことが 2 度あつた。暖炉の中のほこりが全部家の中に入って、皆真っ黒になった。きのこ雲はとても大きくて赤色で、徐々に大きくなった。音も聞こえた。興味を持って外に出てしまつて、馬鹿だったと思う。私たちは家の中にいたが、川のそばにいた人たちもいた。その人たちの中には、病気になった人も多い。私にはそんなに影響はないかもしれないが、他の人や、友達の子供なども皆病気だ。もちろん核実験のせいだ。私自身もいらいらしたりすることがある。

子供は 1962 年と 1964 年に生まれた。地上実験が終わつたあとでよかつたと思う。子供達に影響がないよう祈っている。娘は軍人と結婚し、クルチャトフで看護師をしていた。現在は夫の仕事の関係でロシアに住んでいる。

我が家の窓ガラスが割れたとき、他の家の屋根が落ちた。軍が、屋根が落ちるかどうかの実験をしていた建物があつた。実験用に軍人が建物を作り、壊れるかどうかをみていた。人々が集まっていた 5 つの丈夫な家は壊れなかった。

きのこ雲が見えた後、雲が大きくなるにつれて、爆風が来た。実験があることは軍人から連絡があつた。例えば「明日の 10 時に爆発がある。暖房や電気をつけないで、自分の家を出て、決められたひとつの家に集まるように」という連絡だった。

軍人からの命令は「外に出てはいけない。例えば市役所のような大きい建物に全員集

⁴⁴ インタビューをした現在の自宅とは別の、実験当時住んでいた家を指す。

まるように。その建物に全員入らなかつたら、丈夫な家に集まるように。」という内容だった。軍人が各家を丈夫か丈夫でないか見て回っていた。実験のたびに毎回必ず軍人が来た。単なる「実験」ではなく「核実験がある」という連絡だった。「核」実験と聞いても、第2次世界大戦のようなものではなく、戦争ではないから、何とも思わなかった。世界のため、軍の仕事として核実験は必要なのだと思っていた。

カザフスタン領土内で実験が行われることを誇りに思うようなことはなかったが、そのあとで病気などになるとは知らなかった。戦争でないと思っていたし、皆のためだと思っていた。軍隊の仕事だと思っていた。

実験の前後、軍人は各家のそばにあちこちに立っていた。村全体におよそ100人の軍人が立って、爆発のとき、外に出ないように見張っていた。軍人は実験の前後に村に出入りした。5日から1週間程度村に滞在した。

主人は実験のあったところに行ったことがある。直径100mほどの原子湖が出来ていた。

結婚したのは1960年9月23日で、もうすぐ50周年になる。1956年の実験当時、主人は18歳で、マイスコエには住んでいなかった。1959年にマイスコエに引っ越してきた。子供は3人で、息子が2人（1962、1964年生まれ）に娘1人（1969年生まれ）だ。3人ともほぼ健康だ。ロシアのクラスノヤルスク⁴⁵に息子2人が住んでいる。同じくロシアのスペルロスク⁴⁶に娘が住んでいる。

子供たちの国籍は、生まれたときはカザフスタン国籍だったが、旧ソ連時代だったのでロシア国籍でもカザフ国籍でもどちらでも差はなかった。現在はロシア国籍だ。上の息子は1989年に、下の息子は1993年にロシアに渡った。ここには仕事がないから、帰ってきて欲しいとは思わない。

当時のマイスコエ村の人口は、自分が高校生ぐらいの子供だったのではっきりとは覚えていないが、地区の中心でもあったので1万人ぐらいだったのではないかと思う。学校は小学校と高校の2校があり、会社などもあった。生徒も全部で2000人ぐらいいたと思う。今はほとんど人がいない。

政府に対しては何も要求はない。身体の調子が良くなって欲しい。健康を返してくれ、と言いたい。

年金は月に15000テンゲ+被曝者手当1800テンゲだ。主人は年金13000テンゲ+

⁴⁵ ロシア中東部、東シベリア、クラスノヤルスク地方の行政中心地。シベリアのロシア人集落としては最も古い町のひとつ。

⁴⁶ 現在のエカテリンブルク。ウラル山脈の南、カザフ国境近くに位置する。

被曝者手当 1800 テンゲだ。働いた年数が違うので、金額が違う。主人は仕事のないときがあったので、若干額が少ない。

年金は毎月郵便局で受け取る。パブロダールから送金されるようだ。詳しいことはよく分からない。

私達が行くことはないが、村の人達が買い物をするときは、自家用車でパブロダールへ行くことが多い。

マイスコエ⁴⁷、男性、1936年生

最終学歴は専門学校卒。

1959年にロシアからマイスコエへ来て、現在まで居住している。

当時は石でできたアパートに住んでいた。建築の仕事をしていた。

自分で食事を作っていた。食事内容は、牛肉、鶏肉、魚、野菜、ミルクなどだった。

現在の体調はあまりよくない。心臓病、肝臓病などがある。半年前に検診を受けた。セミパラチンスクでも検診を受けたことがある。現在は薬を飲んでいない。10年ほど前から体調が悪くなった。もちろん核実験の影響だと思う。

核実験のことはマイスコエへ来てすぐ知った。1959年に初めて実験を経験した。私が経験したときは、爆風は感じられなかった。ほこりもなく、雨も見なかった。

マイスコエに引っ越してきてから、いらいらしたり、不眠などの症状がある。それまではなかった。核実験のせいでたくさんの方が病気になった。それはとても悪いことだと思う。

ネバダ・セミパラチンスク運動については聞いたことはある。セミパラチンスクで集会有ったということは聞いている。もしそのときそういった集会在なかったら、さらに苦しい思いをしたかもしれない。運動の方向性は間違っていなかったと思う。

仕事で実験場に行ったことがある。車の修理の仕事をしていた1971年から1973年の間、何度も実験場に入った。実験場内にスイカを植えて、それを食べたりした。実験場の地下実験施設内にも入ったことがある。

病気が核実験のせいだと分かってきたのは15年前、実験が終わってからのことだ。それまでは、それほど病気になったりはしなかったので気付かなかった。若かったので何とか治せたのかもしれない。

⁴⁷ マイスコエ1の配偶者。

マイスコエ 3、女性、1935 年生

最終学歴は中学校卒。

バシキリヤ生まれ。1954 年にセミヤルカに転居し、1958 年にはアクジャルに転居した。その後、1960 年頃マイスコエに転居し、現在まで居住している。

当時の食事は、今よりも良かった。酒、ワインも飲んだ。

今の体調は普通。心臓病、胃の病気などがある。5 月に検診を受けた。薬も少しずつ飲んでいる。病気になったのは最近で、歳を取ったせいもあるし、核実験のせいかどうかは分からない。セミヤルカに引っ越してすぐ、実験のことを知った。1956 年頃、爆発があって、大きな雲を見た。窓が割れた。爆風があったかどうかは覚えていない。

「実験」ではなくて「爆発」があるという連絡が毎回あった。きのこ雲は見たことがない。爆発を感じただけ。爆発が何回あったかは覚えていない。

昔は体調がとてもよかった。15 人子供を産んだが、5 人が亡くなった。子供 10 人全員が被曝者手帳を持っている。孫も何人かは持っている。子供たちの体調は今のところ良い。息子と娘が 1 人ずつだけマイスコエに住んでいる。その他の子ども達は、ロシア、セミパラチンスク、パブロダールにいる。

マイスコエ 4⁴⁸、女性、1940 年生

最終学歴は中学校卒。

現在のアルマティ州内に位置するアンブリーフカ⁴⁹という名の村で生まれた。1960 年にマイスコエに来た。

アパートに住んでいた。食事はパン、牛肉、ミルクなどで、店で買っていた。

体調は良くない。できるときに自分で家事をしている。微熱、食欲減退、頭痛、めまい、倦怠感、寝汗がある。検診を受けている。薬も飲んでいる。心臓病、糖尿などがある。今年から急に体調が悪くなった。核実験のせいだと思っている。こちらに転居してきた 1960 年頃、実験を目で見て知った。きのこ雲を見た。爆風もあった。当時住んでいた家の窓も割れた。光は見たが、ほこり、雨は体験しなかった。

爆発の前、クルチャトフから軍人が来た。何回も爆発を見た。土が割れたような音がした。建築の仕事をしていたので、そういった音を連想したのかもしれない。きのこ雲を見たが、見る分にはきれいだった。

⁴⁸ マイスコエ 5 の配偶者。

⁴⁹ 位置は確認できなかった。

マイスコエ 5⁵⁰、男性、1941 年生

バシキリヤで生まれ、1957 年にパブロダールに移住してきた。翌 1958 年にセミヤルカへ転居し、さらに翌 1959 年にマイスコエへ来て、現在まで居住している。

当時はアパートに住んでいた。食事は、ラクダの肉などを食べていた。ミルクはあまり飲まなかった。

今現在の体調は悪くないが、足が痛い。家の仕事は全て自分たちでやっている。頭痛、めまいがある。心臓病もあるが、病院には行っていない。薬をたくさん飲んでいる⁵¹。ここ 2、3 年で体調が悪くなった。

体調不良は核実験の影響だと思う。こんなにやせている。バシキリヤに行ったら太るが、ここに帰ってくるとやせる。

1958 年、セミヤルカで初めての爆発を見た。ラジオで連絡があった。夜間にも 1 度実験があった。セミヤルカにいたときほうが爆発を強く感じた。雨、ほこりを感じたことはない。

現在の病気は全て核実験のせいであると確信している。被曝者手当をもらうためではなく、心からそう思っている。パブロダールにいた頃は、実験のことは知らなかった。1958 年にセミヤルカに来てから知った。

1950 年後半にバシキリヤからカザフにきた人は 40 人ぐらいいる。以前はバシキリヤからの移住者が多かった。

2007 年 8 月 27 日 カザフ放射線医学環境研究所

(質問票への回答は行わず、インタビューのみ実施)

研究所 1、男性、1941 年 10 月 11 日生

ベスカラガイ地区カマトガイ⁵²村で生まれた。1962 年にセミパラチンスクに転居し、1993、94 年頃シャガンに転居し、現在まで居住している。

子供だったので、それが 1949 年の実験かどうか分からないが、雲がとても赤かったことを覚えている。近くに軍隊のグループがあつて、彼らが毎回来て、外に出ると言った。そして爆発の後は家に帰りなさいと言われた。

⁵⁰ マイスコエ 4 の配偶者。

⁵¹ ここで、薬がお皿の上に山盛りの様子を見せてくださる。

⁵² 正確な位置は確認できなかった。ベスカラガイ地区は核実験場北東に接する地区であり、クルチャトフ、シャガン、ドロン、プラス等の村を擁する。

実験については軍人が「爆発」だと言っていた。一番最初の爆発が一番印象に残っている。

両親はクルチャトフの近くの小さな村で牧畜をしていた。

子供の頃楽しかったのは、友達と一緒に集まって、外で小さな石を蹴ったりする遊びをしたことだ。兄弟は兄が4人と姉が2人の7人だった。兄は全員亡くなり、今は3人だけが残っている。末っ子だったが、両親とけんかしたりもした。

小・中学校はカラトガイ村で卒業し、高校はセミパラチンスクで学んだ。卒業後はセミパラチンスク駅で鉄道の駅員をしていた。1993年まで貨物列車の運行管理の仕事をしていた。その後は年金生活を送っている。

2005年から身体の調子が悪くなった。頭の後ろが痛い。研究所に来てから少し治った。それ以外は特に悪いところはない。頭痛が核実験のせいかどうかはよく分からない。被曝者手帳は持っている。

旧ソ連時代のほうが良かった。仕事があったし、服の質も良かった。今の物価はとても高い。

好きな食べ物はベシユパルマック⁵³や馬乳酒だ。タバコも吸わないしお酒も飲まない。馬乳酒はお酒ではない。

自分の人生で一番良かった時代は子供の頃や青春時代だ。高校のときだと思う。スポーツは特にやらなかったが、馬に乗ったり走ったりした。馬が大好きだ。

1961年に結婚したが、2年前に妻を亡くした。息子は2人おり、1人はすぐ近くに住んでいる。もう1人はウシトベ⁵⁴にいる。2人とも結婚している。上の息子には3人、下の息子には4人子供がおり、皆元気だ。核実験の影響がないか、少し心配はしている。

旧ソ連時代が良かったとは言っても、実験を実施したことは悪いことだし、核実験には絶対に反対だ。ネバダ・セミパラチンスク運動やスレイメノフについて知っている。とても感謝している。

年金は毎月16000テンゲで、さらに被曝者手当を2700テンゲもらっている。息子とは別々に住んでいるので、1人で暮すには十分な額だ。

ソ連時代にもイスラム教を信仰できないというわけではなかったが、妻が亡くなってから教会に行くようになった。月に一度は行っている。

⁵³ カザフスタンの代表的料理のひとつ。

⁵⁴ アルマティから北方へ約300kmに位置する村。

研究所 2、女性、1942 年生

最終学歴はセミパラチンスク教育大学卒。

カラガンダ州で生まれた。幼い頃に転居し、ウルジャル地区ナウアリ村⁵⁵に 1965 年まで住んでいた。両親は農業をしていた。ナウアリ村内の高校を卒業している。ナウアリ村はとても大きな村だが、人口ははっきりとは分からない。1965 年末、セミパラチンスク教育大学に行っていたときに結婚し、カラウルに転居した。現在はセメイ近郊に住んでいる。

主人はカラウル出身で、今も一緒に幸せに暮している。主人はカラウルにある音楽学校の校長をしていた。生徒数は約 60 人で、7 歳から 15 歳までの子供が来る。主人はセミパラチンスク教育大学に入る前に、音楽の専門学校に行っていた。大学では夫婦ともにカザフ語を専攻していた。

自分はアバイ高校でカザフ語を教えていた。

人生で一番楽しかったのは学生時代だ。

核実験のことを知ったのはカラウルに転居してからだ。それまでセミパラチンスクにいたが、全然知らなかった。

1985 年頃、カラウルに住んでいたとき、当時 50、60 歳ぐらいだった男性の隣人がアヤグス村での話をしてくれた。アヤグス村では約 30 人が実験場へ連れて行かれ、実験の前にお酒を飲まされて、「今から実験がある」と言われたそうだ。その 30 人のうちのほとんどが病気になったり、自殺したりした。人体実験であったとは思わないが、お酒を飲ませて、分からなくしたのではないかと思う。

主人が小さい頃の話だが、実験の際には軍人が来て「何時から何時まで外に出て、家の中にいてはいけない」と言われていたそうだ。爆発のときにはほこりが舞い起こったと言っていた。実験後家に戻ってから、頭痛がしたとも言っていた。

牛や馬が急に死んだ、といった悪いうわさをよく聞いた。カラウルに来てから病気になった。カラウルには今も放射線の影響があるのだろうか。私たちだけではなく、子供、孫の世代にも影響を与えるほどの線量が残っていると思う。

舌と肺以外は全て病気だと医師に言われた。心臓病、甲状腺の病気、頭痛、足が痛くて歩けない、などの症状がある。薬を飲んで少しはよくなった。核実験のせいだともちらろん思っている。カラウルに来るまでは太っていて元気だったが、今はやせている。

実験を目で見たことはない。皿のようなものが飛んでいるのを見たことがある。赤い

⁵⁵ 位置は確認できなかった。回答者の証言をそのまま掲載している。

色の丸いもので、直径 30cm ぐらいのものが 1 枚飛んでいた。音は聞いていない。夜、外に出たときに見たが、主人を呼びに行っている間に消えた。私だけでなく多くの人が見たが、実験に関係があるかどうかは分からない。

生まれたときからイスラム教徒だ。ソ連時代には、教会に行くのはよくないことだと言われていたが、心の中にはずっと信仰心があった。1 週間に 1 度、金曜日にはモスクに行っている。お祈りはモスクに行ったときだけで、日常的にはしない。

旧ソ連の生活に慣れてしまった。失業者がなかったし、大学を出てすぐに仕事があった。今は、アパートも買えない。生活が苦しい。現在はセミパラチンスクから約 8km のところに住んでいる。

カラウルの診療所でも何度か診てもらった。よい先生だった。

ネバダ・セミパラチンスク運動の集会を知っている。カラウルで参加したこともある。とても多くの人が集まっていた。オルジャス・スレイメノフに手紙も書いた。カラウルはアバイ⁵⁶の故郷だから、スレイメノフが 2, 3 回来たことがある。

尊敬する人はアバイ先生⁵⁸だ。精神的な教育をカザフ人にした人だ。子供の頃から崇拜している。教科書で勉強した。

好きな食べ物はサラダなどの野菜料理だ。自分で作る。ジャムなども自分で作る。趣味は花や野菜を育てることだ。

今一番願っていることは平和だ。

子供は 4 人いる。娘の 1 人が医師になり、もう 1 人は教師になった。息子 2 人は車の修理をする技師として働いている。

年金は月に 17000 テンゲで、他に被曝者手当として 1300 テンゲ以上受けとっている。

研究所 3、女性、1942 年生

カラウルで生まれ、現在まで居住している。カラウルの学校で調理師として給食を作っていた。学校を卒業してから年金がもらえるようになる 55 歳までずっとその仕事をしていた。女性が年金をもらえる年齢は 52 歳～55 歳ぐらいだ。

年金は、被曝者手当も合わせて月 17000 テンゲだ。被曝者手当が正確にいくらなのかはわからない。それ以外に主人が亡くなってから、月 2000 テンゲの遺族年金ももらっている。

⁵⁶ カザフスタンを代表する思想家・文学者であるアバイ・クナンバエフ (1845-1904) を指す。

結婚したのは19歳のときだ。今から8年前に主人は亡くなった。主人はトラクターの運転手や、技師をしていた。主人と2人で働いていたので、生活は豊かだった。貯金はする必要がないと考えていた。今では、子どもたちは貯金している。

ソ連時代も今もどちらもよい。そんなに悪くないと思っている。

現在は、子供や孫たちの成長が楽しみだ。

食欲はまあまあだ。好きな食べ物はミルク、野菜、肉で、嫌いな食べ物は、辛いものだ。胃が痛くなるから嫌いだ。油っぽいものも嫌いだ。

子供は息子1人、娘5人の6人だ。娘5人のほうに9人の孫がおり、息子のところにも3人孫がいる。子ども達は皆元気だ。

15年ぐらい前に集会があり、核実験場について知った。自分はカラウル出身で、主人はカイナル出身だったが、夫婦で核実験についての話をしたことはなかった。主人が亡くなったのは実験のせいだと思う。主人は肺がんで64歳のとき亡くなった。

自分で爆発を見たことはない。「実験があるから外に出るように、と言われた」という話は聞いた。カラウルに住んでいたので、うわさなど、言葉では聞いたが、爆発自体は見していない。サルジヤル、カイナルにもそういう人がいると思う。

2008年8月24日 オゼルキ村

村長へのインタビュー、1961年生

カザフ独立後から13年間、村長をしている。村出身ではないが、大学卒業後すぐにオゼルキ村に勤務した。その後、他地域での勤務を経て村長になった。

村の人口は約2000人で、カザフ人67%、ロシア人30%、その他3%の割合だ。村の住民の情報は役場で管理している。以前はロシア人・ドイツ人が多く、ロシア人が約50%、ドイツ人が約30%だった。ロシア人・ドイツ人の村だった。独立後はいなくなり、カザフ人が引っ越してきた。

ソ連時代より以前からロシア人が多かった。戦争のときに連れて来られた。今住んでいるカザフ人も、独立前からいた人ばかりではなく、コクペクティなど他の村から転居して来た人も多い。セミパラチンスクから一番近い村なので、転居してくる者が多い。1960年代までにこの村にいた人は多くない。

被曝者手帳を持っている人が正確に何人なのかは分からないが、割合は高いと思う。持っている人のリストは役所にはないが、1989-90年までに生まれた人は皆、手帳を持っている。

被曝者手当の金額は、住んでいる地区によって違う。被曝者手当は国が支払っている。この村の手当額は 2000 テンゲだ。毎月、手帳を持っている人全員に支払っている。2000 テンゲという金額は多い方ではない。実験場に近い地区ほど金額は高い。住民は郵便局へ行って、給与と一緒に手当を受け取る。また、手帳を持っている人は年間 12 日～14 日の休暇を余分にもらうことができる。

確かなことは分からないが、核実験の影響はわが村にもあり、特に子供に影響があると思う。子供にがんなどが多いが、逆に 80、90 歳で健在の方々はお元気だ。

現在に至っては、核実験には絶対に反対だ。影響がどれほど続くのかわからないからだ。実験が行われた当時は、戦争だったのだから仕方がなかったのかもしれない。

村長として、村にとって今一番大事なことは医療の充実だ。村には小さな病院が 1 つしかなく、入院の設備がないため、入院しなければならない人はセミパラチンスクへ行っている。セミパラチンスクまでは距離的に近いのでその点はあまり問題ではない。

現在、村の農業の問題点は、村に若い人が残っていないことだ。農村を維持できない。村の農作物の主なものは野菜である。ジャガイモ、キャベツ、トマト、スイカ、メロンなどを作っている。

セミパラチンスクへはバスがあり、日に何度か往復する。バスは 2 台ある。しかし自家用車を使う人が多く、バスの利用者は多くはない。

学校は村に 1 つで、小中高が一緒になっており 11 年で卒業する。生徒数は 780 人で、先生は 50 人勤務している。学校は 1987 年に建てられたものだが、最近改装した。教員の給与はおよそ月 3 万 5000 テンゲだ。教員より高い給与を受け取れる職業もあるが、高収入の職業だ。

役場の職員は 5 人だ。この役場でいくつかの村を管轄している。

村に韓国人は 2 家族住んでいる。2003 年にこの村へ来て、農業をして暮らしている。日本人はいない。

広島・長崎については学校の歴史の授業で学んだ。人体に影響があり、がんになる、といったことは大人になってから知った。現在出は学校でもそういったことを勉強している。これからはこのような被害がないように。平和な世の中が続くように。

オゼルキ 1、女性、1948 年生

8 年間学校に通った。

オゼルキ村出身で、生まれた時から現在までこの村に住んでいる。

1949年当時の家族構成は、祖父、両親と自分の4人家族だった。祖父は事故で1975年に亡くなった。父は1918年生まれで、1974年に胃がんで亡くなった。母は1918年生まれで、1994年に亡くなった。

両親の当時の職業は農業で、家は木造の一軒家だった。

当時の食事は、ミルク、馬乳酒、肉などだった。牛を飼っていたので、食事には問題がなかった。ミルクは一日に約2リットル飲んでいて、

現在の健康状態はまあまあだ。検診を最後に受けたのは3年前だが、身体には特に問題はない。

身体の調子が悪いのが核実験のせいかどうかは分からない。核実験については1989年、1990年頃に知った。いつも農業をやっていたから、外にいたので、家の揺れなどは感じなかった。爆発があったことも知らなかった。爆風、熱なども全く感じなかった。

当時、病気になるようなことはなかったし、悪夢をみるなどの心的な影響もなかった。

主人は3年前(2005年)にがんで亡くなり、核実験のせいだろうと医師に言われた。1989、90年より以前には、村で核実験について話題になったこともなかった。仕事で忙しく、この村の人は爆風などがあっても気にならなかったのだと思う。実験のとき、兵士が「実験があるので注意するように」と連絡に来たことはあった。

主人も私と同じくオゼルキ村出身で、ずっとこの村に住んでいた。自分も結婚してからこの家⁵⁷に住んでいる。

子供は皆元気だ。2人ともセミパラチンスクで仕事をしている。

主人の病気が核実験によるものだと医師から聞いても、あまり何も感じなかった。主人はずっと病気だったので、実験の影響はずっと感じていた。

被曝者手当は2000テングだが、主人の死が核実験によるものと認定されたため、主人が亡くなってからはさらに毎月5000テングもらっている。病気になったら病院へ行き、可能性があれば研究所へ行って核実験が原因であるかどうかを診てもらおう。実験のせいであると認定されたら、死後でなくても、生前もお金がもらえる。主人のときはそれをしなかったが、核実験のせいではないかと感じてはいた。核実験によるものであるとの認定基準は、病気の種類と、住んでいる地域で決まっている。

手当を受けることができカザフ政府に感謝している。さらに保障が欲しい、と思ったことはない。

⁵⁷ インタビューを行った家を指す。

オゼルキ 2、女性、1941 年生

5 年間学校に通った。

ロシア西部のカザン⁵⁸近郊の村で生まれ、1946 年にセミパラチンスクに移住してきた。その後 1960 年よりここオゼルキ村に住んでいる。

1949 年当時の家族構成は、母、兄、姉、自分の 4 人家族だった。母は 1904 年生まれて、11 年前（1997 年）に亡くなった。専業主婦をしていた。兄は 1930 年生まれて、2 年前（2006 年）に心臓病で亡くなった。長い間病気をしていた。姉は 1937 年生まれて健在だ。

当時の家は木造だった。1960 年まで居住していたセミパラチンスクでの家も木造だった。

当時の食事は肉、野菜、ジャガイモなどだった。ミルクはあまり飲まなかった。セミパラチンスクに住んでいたときから、牛は飼っていなかった。

現在の健康状態はあまりよくない。高血圧である。最後の検診は 3 年前で、研究所の先生方が村に来て検診を行った。甲状腺も悪い。

1991、92 年頃から病気がちになった。核実験の影響かどうかはわからない。仕事をしていたときには病気にはならなかった。

1953 年頃、小学生のとき、爆発の音を聞いた。この頃から頭痛や胃が痛いなどの症状があった。現在も続いている。1949 年頃、爆風を感じた。学校の教室の中にいたときに感じた。何だろうと思って、面白がって外に出た。実験があったとき、子供は皆外に出た。爆風を感じたのは一度だけだ。爆風に関して、先生には何も言われなかった。ちょうど授業が終わって帰るところだったせいかもしれない。

実験があったとき、悪夢を見た。

核実験が良いことなのか悪いことなのか、私にはよく分からない。

なぜカザフスタン・セミパラチンスクに移住してきたのかはよく分からない。ロシアに帰ったことはない。

核実験の人体への影響を知ったのはいつ頃か、よく覚えていない。

被曝者手当は 2000 テンゲだ。1991 年当初は 1200 テンゲだったが、少しずつ金額が上がっている。

仕事は農業だった。キャベツ、トマト、キュウリなどを作っていた。今も家の庭で作っている。10 人で 1 つの農地を耕していたので、農地は広かった。

⁵⁸ ロシア西部、タタルスタン共和国の首都。

この村にはお嫁に来た。主人は1ヶ月前に亡くなったばかりだ。

(以下、同居している息子の回答)

セミパラチンスクで消防署員をしている。この村から通勤している。村の約80%がセミパラチンスクへ通っている。バスで片道30分ほどの距離だ。バスの料金は片道90テンゲだ。タクシーだと一人150テンゲ支払わなければならない。

オゼルキ3、女性、1929年生

最終学歴は農業専門学校卒。

グルーホフカ村生まれ。1953年より現在までオゼルキ村に住んでいる。歳なので記憶が定かでない。

1949年当時の家族構成は、母、自分、弟2人の4人家族だった。母は1903年生まれで、10年前(1998年)にロシアで亡くなった。弟の1人は1942年生まれで、オゼルキ村在住だ。もう1人の弟は1946年生まれで、ロシアに住んでいる。

当時の家は木造だった。

当時の食事はミルク、野菜(トマト、キャベツ、ジャガイモなど)だった。肉はあまり食べなかった。ミルクは一日1リットル飲んでいた。

記憶があいまいで、息子たちを判別できないこともある。

現在の健康状態は、良いとはいえないがまあまあ普通だ。現在の病気は高血圧と心臓病だ。薬は飲んでいる。最後の検診はいつ受けたか、覚えていない。病気になったのは10年前だ。核実験のせいかどうかは全く分からないが、自分としては核実験によるものだと感じている。

爆発が何年にあったのかは覚えていない。最初の実験のときから知っていた。地面の揺れが毎日のようにあった。いつ頃かは覚えていない。

悪夢を見ることがある。

息子も被曝者手帳を持っており、1800テンゲの被曝者手当を受け取っている。私自身の被曝者手当は2000テンゲだ。息子は体調が悪く仕事ができないので、家事をしている。核実験の影響だと思う。息子のほか、娘とその子供2人と共に暮らしている。娘は離婚している。上の孫が26歳で、健康上の問題がある。下の孫は専門学校生だ。

今心配なことは家族のことだ。皆が元気かどうかを心配している。息子と私の2人分の年金と手当、合わせて3万テンゲで生活している。娘が皆の世話をしている。